学校法人 大阪YMCA
YMCA学院高等学校
校長 鍛治田 千文

2023 年度 学校経営計画及び学校評価

【学校関係者評価委員】

評価委員	所属・役職	事務局	所属・役職
岡本 康志	特定非営利活動法人凸凹革命・理事長、特別支援教育士	鍛治田 千文	YMCA 学院高等学校・校長
原田 孝	大阪総合教育支援研究所・代表	小林 直樹	YMCA 学院高等学校・校長代理
廣田 雅司	大阪女学院中学校高等学校・IB アドバイザー、元校長	池田 博人	YMCA 学院高等学校・校長補佐
博野 英二	LLPチーム経営研究所・代表	二宮 聡	YMCA 学院高等学校・教頭
		古谷 佳之	YMCA 学院高等学校・事務長
		林 貴子	YMCA 学院高等学校・主任

1. めざす学校像

私たちの学校は、YMCA の正章に掲げる Spirit(精神)・Mind(知性)・Body(身体)のバランスを保ち、未来に希望を持ちチェンジメーカーとなる（=社会をよりよく変えていく）青年を育むための、自由で開かれた学校であることを目指している。そのために「命の尊厳」を教育目標とし、次の4つを教育目的とする。

1. 自分のペースで自分らしく学び、学ぶ楽しさを知ることから自分の中にある可能性を見つける。(学び)
2. 自分の将来に夢と希望を持って歩む進路を見つけ、目標に向かって進む力を身につける。(進路)
3. グローバルな視点に立って物事を考え、世界の平和を創り出す人財を育てる。(グローバル)
4. イエス・キリストの愛と奉仕の生き方に学び、一人ひとりの尊厳を認め、互いの存在を大切にし、信頼しあえる人間を育む。(自尊心)

2. 中期的目標（2022～2024 年度）

1. 新学習指導要領に沿って、授業づくりを深め、学びの基礎を身につける教育を行う。

(1) 通学型・自宅学習型コースを完成させ、更なる内容の充実を図る。

・多様化している高校生に対して、合理的な配慮を行いながら学校への定着を図り、卒業へと導く。そのために設置した「Y チャレンジ」「マイ スペース」「スタンダード」「マイスペ+」「グローバル」「健康スポーツ」「進学」「トランスリンガル」「Y リンク」の各コースのカリキュラムを充実させる。

・上記9つのコースを中心に、一人ひとりにあった学び直しや仲間づくりを積極的に実施し、学力の定着や関係性の構築を図る。

(2) 教科力を向上する。

・教科担当を中心に、各教科におけるカリキュラム研究・授業研究を行い、生徒が自発的かつ積極的に学習に向かうために、より興味・関心を持てるスクーリングの基盤を確立する。また、レポートの改訂に取り組む。

・各期授業アンケートを実施し、スクーリング担当者にフィードバックを行う。

2. 生徒理解を深め、生徒一人ひとりに寄り添った合理的配慮のある生徒支援体制および校内環境（ユニバーサルデザイン）を実現する。

(1) 生徒支援部会を中心に、校内の生徒支援体制および校内環境を整備する。

・生徒情報の共有を密にし、担任が抱え込まず、学校全体で支援していく体制とする。

・教科担当講師にも必要な生徒情報を共有し、連携を図る。合理的配慮の実践に全校を挙げて取り組む。

・生徒・保護者が安心してつながることのできる居場所作りを行う。

・研修の実施や生徒支援アドバイザーの助言によって担任の生徒支援力を向上させる。

・生徒が校内で安心して学び、過ごせるような環境整備を行う。（ユニバーサルデザイン）

(2) 専門家や外部との連携を積極的に行う。

・特別支援教育コーディネーター、スクールソーシャルワーカーを中心に担任、カウンセラーや養護教諭、外部との連携を密にする。

・キリスト教学校教育同盟カウンセリング研究会をはじめとする外部機関との連携を行う。

3. 確実な進路保障の仕組みを作る。

(1) 学び直しができる仕組みを整え、進路に向き合う力を育成する。

・一人ひとりが学び直しに取り組むことができ、自ら進んで学習をするような仕組みづくりを行う。

・生徒のニーズにあったコースとなるよう各コースの内容をより充実させる。

(2) 生徒一人ひとりにあった進路支援の充実

・生徒一人ひとりの長所を生かした進路実現ができるように、適切な時期に保護者・生徒と面談を実施し、進路決定率を向上させる。

・できるだけ早期に進路への意識付けができるように進路支援のカリキュラムを構築する。

・キャリア教育の一環として、他機関と連携し、一人ひとりが多様な職業人と出会い、対話し、校外活動等が体験できるプログラムを構築する。

(3) 自己実現可能な学習支援

・進学コースを中心に大学受験に対応できる学習支援の仕組みを構築する。

4. 開かれた学校づくりを目指し、生徒が活躍できる場を増やす。

(1) YMCA の特徴を活かした海外交流プログラムを充実させる 。

・YMCA のネットワークを通して海外の学生と交流する機会を提供し、グローバルな視点に立って物事を考える機会を持つ。

(2) 生徒が主体的に関わるスクーリングや特別活動を実施する。また、ボランティアや世代間交流の機会を提供する。

・総合的な探究の時間や特別活動において、YMCA の特長を生かした内容（ペアワークやグループワークなど）を実施する。

・YMCA 内部での連携を通して、学校通信で学校行事やボランティア案内の掲載を増やし生徒が積極的に取り組めるように支援する。

(3) 他校、他機関と連携する

・現在の連携先のキリスト教学校教育同盟校や大阪府通信制高校グループ・一般社団法人ひらくとの関係性を深め、NPO 法人・医療・教育・福祉機関と積極的に連携を取り、生徒の可能性をひきだす成長の機会とする。

5. 持続可能な学校とするための体制を確立させる

(1) 社会の大きな変革の中で新しい学校の形を探求し、地域社会に貢献できる学校を目指す。

・ICT の活用を図り、Edtech を推進する。
＊レポートの電子化（ロイロノートの活用）に取り組み、対話的・協働的な学びの場の実現に取り組む。

・専修学校高等課程と共にインクルーシブ教育実践校として打ち出し、生徒を地域とともに育む。

・日本語のサポートが必要な生徒へのカリキュラムを構築する。

・医療機関や公益財団法人、その他教育機関と連携し、健康に不安をもつ生徒の「身体づくり」の一環として、当事者およびその保護者の学びや分かち合いの場、オンラインでのヘルスケアプログラムやヘルスケアキャンプを実施し、その効果を検証、考察し発表する。

(2) 組織改善の取り組みと将来を担う人材の確保をする。

・教員間で支えあう組織作りへと意識改革を行う。
・生徒に寄り添い、信頼関係を築き、学力向上につなげることができる教員の確保、養成を行う。

3. 教職員自己評価の結果と分析・学校関係者評価委員会からの意見

教職員自己評価の結果と分析〔2024 年 3 月実施分〕
1. 新学習指導要領に沿って、授業づくりを深め、学びの基礎を身につける 教育を行う。 昨年度より引き続き、「教育課程の周知」「教育計画」・「教員・教科間連携」に注力した。特に、「教育課程の周知」の項目においては、評価 A（よくあてはまる）と回答した割合が 9.1%（2021 年度）、26.3%、20.0%（2022 年度）（2023 年度）となり、年々ポイントが上昇傾向にある。これは、各教科担当がグランドデザインに基づき、観点別評価3観点を意識して取り組み、自信をもって教育活動ができるようになってきたことの表れと捉えている。「教員・教科間連携」の項目においては肯定的評価（A と B）が77. 8%と、昨年度に比べ 2.2%下降した。より良い教育を提供するため、多様な働き方の教員間の連携強化を図る必要があると考えられる。 **2. 生徒理解を深め、生徒一人ひとりに寄り添った合理的配慮のある生徒支援体制および校内環境（ユニバーサルデザイン）を実現する。** 2019 年度から合理的配慮の推進・整備をすすめたことで教職員の生徒支援への意識が年々向上しており、今年度の生徒支援に係る肯定的評価は 95.5%であり、昨年度と比較し 5.8%上昇した。 掲示物や印刷物などに教科書 UD フォントをできるだけ使用し、誰にとっても学びやすい環境を整えたり、学習支援員やスクールソーシャルワーカーを配置したり、教職員が一丸となって、学校方針を理解したうえで保護者や関係機関と連携を取りながら支援体制を整えている、本校の強みを表した数字であると考える。 **3. 確実な進路保障の仕組みを作る。** 進路部会を中心とした進路支援の取り組みを全校的に行なっており、進路支援に係る肯定的評価は 97.3%であり、昨年度と比較し 7.3%上昇した。進路選択肢の多様化や入試方法の複雑化に対応するため、進路部会を中心に教職員への最新入試情報の提供や研修を実施し、生徒情報の共有についてもこれまで以上に強化した。その結果、2023 年度の進路決定率は 90.0%であった。 また、生徒が社会的・職業的自立に向かい、将来を見据えることができるよう、入学後の早い段階からキャリア教育を実施し、生徒一人ひとりの興味や関心・適性に応じた将来のイメージが掴めるような内容をスクーリングや特別活動に取り入れた。今後は、更により社会との架け橋となるような進路支援を目指し、キ

ャリア教育と保護者連携の実践をすすめる。

4. 開かれた学校づくりをし、生徒が活躍できる場を増やす。

関係団体との連携、学校近隣地域との関係を生かし、多様な生徒を受入れる学校として学校行事やボランティア活動、地域交流等に取り組んできた。「ボランティア活動」の項目においては 94.7%が肯定的評価であり、昨年度から 14.7%上昇した。特に、本校講師が主宰する一般社団法人と連携し、自然体験や地域の多くの職業人と出会う機会を生み出し、家庭と学校以外での体験を通じた成長の場を提供することができた。「地域交流について」の項目の肯定的評価は36.9%と昨年度から 9.8%下降した。特別活動として定期的に地域の清掃活動は行なっているが、“交流”とまでは発展していないため、この点は今後の課題である。引き続き学校内外の連携によるボランティア活動等をより推進し、家庭と学校以外での 居場所と良質の出会いを提供することで、生徒の可能性を伸ばすことに力を入れていきたい。 また、そのことを学校全体として支援し、生徒が主体的・協働的に参加できる仕組みづくりを行う。

5. 持続可能な学校とするための体制を確立させる 。

Edtech 推進に際し、メディアルームの PC の入れ替えを行なった。また、2024 年度からレポートの電子化を進めるための準備期間とした。自己評価の項目では「情報能力育成」「情報モラル指導」「情報セキュリティ教育」のいずれの項目も昨年度と比較しポイントが延びておらず、十分ではないと感じる教職員が多いということが判った。生徒の特性に鑑み、更に ICT を活用した学習環境の充実は必須であり、それに併せて、正しく活用できるスキルを身に着けるための学習内容の充実を図る必要がある。

また、社会の要請に応えるインクルーシブ教育の実践や日本語のサポートが必要な生徒を対象としたトランスリンガルコース設置、健康教育など社会課題に直面している生徒への支援は、継続的に取り組んできた。特に、「健康に関する指導について」の項目においては、肯定的評価が94.7%と昨年度比で 21.4%も上昇した。関西医科大学と連携し、起立性調節障害や過敏性腸症候群、睡眠障害、精神不安など、健康に不安を抱えた生徒を対象としたヘルスケアキャンプ、オンラインヘルスケアや健康のつどいの取り組みが教職員間でも浸透したと考えられる。

組織改善の取組みにおいては、「校内・校外での教職員研修」や、「初任者のサポート状況」に係る項目で肯定的評価が昨年度と比較しいずれも約20%下降した。どこの学校でも人材不足が叫ばれる中、採用方法や研修制度の見直しについて、学校全体で改善に向けた取り組みを継続的に行なっていく必要がある。

学校関係者評価委員会からの意見〔2024 年 7 月 8 日・9 月 2 日・9 月 30 日 学校関係者評価委員会〕

（自己評価チェックシートから）

【学校運営全般】

・教職員間の連携において課題を感じている教職員の割合が昨年度に比べ増加していると数字から読み取れる。生徒数の増加や多様化が進む中で、十分に時間を割いて意見交換を行う必要があるのではないか。

・管理職の考えが教職員に浸透しやすい比較的フラットな組織風土ではあると思うが、不十分な点もあると読み取れるため、より良い組織を生み出すため、更なる改善が必要ではないか。

【教育内容】

・特に健康教育については浸透してきたのではないか。

・教科学習だけではない学びの結果が、保護者アンケートにも反映されている。また、生徒のみならず、保護者が学ぶ機会も提供できたことは大変意義深い。

【生徒支援】

・合理的配慮は他校に先んじてこれまで取り組んできた結果が、年々保護者からも高い評価を得ていると捉えられる。生徒を長期的、且つ将来のことを見据えて個別に対応している点は、なかなか他校ではまねのできないことであり、継続して取り組んでいただきたい。

・これまで他校では登校できていなかった生徒が、本校に入学してから通えるようになるまでのプロセスは非常に根気のいることであるが、生徒本人と家庭、関係機関と学校とが連携して関わることでそれを実現できている点は、非常に素晴らしいことと評価できる。

【教員研修・資質向上】

・研修の実施や派遣については引き続き課題が残る。研修内容、案内方法、対象者の選定、参加できる体制を整える等、引き続き検討をしていく必要がある。

（在校生および保護者アンケートから）

◆良い点

全項目平均で肯定的評価は、在校生 89.5%、保護者 88.2%であり、概ね満足のいく学校生活を送っていると捉えている。

◆改善点

・学び直しの取組みに関する項目で肯定的評価のポイントが低い傾向が見られた。Y ラーニングの活用や学習に困難さを抱えている生徒へのアプローチについて更なる工夫が必要なのではないか。

・学外活動など、随時案内をしているが十分に伝わっていないのではないか。計画的に一覧で知らせるなど、工夫する必要がある。

◆保護者コメント（アンケートへの自由記載欄）一部抜粋

・いつもいろいろ対応していただき助かっています。本人が少しずつ自信を取り戻し、また、学べる場所ができたと家族みんなで喜んでいます。

・体調に配慮したカリキュラムになっていることと、担任の先生が親身になって子どもに接して下さったので、転入学してつらい思いをしていた子どもの気持ちも少しずつ修復されたと思います。

・先生方がとにかく優しく個人を尊重してくださるので、ますます家庭での教育が大切だと思いました。

（卒業生および保護者アンケートから）

◆良い点

「この学校に入れて良かったか」、「入学の前と後とで変わったか」との設問に対する肯定的評価が 95%を超えている点は、教職員の日頃の生徒や保護者への関わりが表れているのではないか。

◆改善点

・所属コースやカリキュラム、学習効果に関する項目で、他項目に比べ評価が低い部分があった。ニーズのミスマッチが無いか、コース選択の際に説明をより丁寧に行なう必要があるのではないか。

・学外活動など、随時案内をしているが十分に伝わっていないのではないか。計画的に一覧で知らせるなど、工夫する必要がある。

◆保護者コメント（アンケートへの自由記載欄）一部抜粋

・入学して本当に良かったです。体調を理解して寄り添って頂いたことで学校に行くことや活動することにとても意欲的になり、いきいきとしてきました。学校が「安心できる場所」ということを実感しました。いろいろな体験もさせていただき、本人の自信にも繋がりましたし、人としても成長しました。3 年間寄り添っていただき大変感謝しております。本当にありがとうございました。

・入学当初は精神的に不安定で、学校に馴染めるか心配でしたが、登校・学習ともに本人のペースでできたことがとても良かったです。また、特別活動などさまざまな体験ができたことで、進路を選ぶことができ良かったと思います。

4. 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取り組み計画	評価指標（設問）	自己評価 （%はそれぞれ在籍生/卒業生の順）
授業づくりを深め、学びの基礎を身につける教育を行う	（ア） 各コースのカリキュラムを完成させ、更なる内容の充実を図る。	（ア） 各コースのカリキュラムで学び直しや進路支援の充実を図り、生徒が着実に学校に定着し、自分にふさわしい進路選択と卒業を実現できるようにする。	（ア） ◆生徒アンケート 問6「所属したコースは満足のいく内容だった」 問37「入学して全体的には満足していた」 問39「この学校に入る前と後で、自分は変わったと思う」 ◆保護者アン ケート 問11「授業のカリキュラム・内容は満足していた」 問12「教育内容はお子様にあっていた」 問32「この学校にお子様をいれて良かった」 問33「この学校に入る前と後で、お子様は変わった」	（ア） ◆生徒アンケート 「所属したコースは満足のいく内容だった」 肯定的評価 96.3%/96.2% 「入学して全体的には満足していた」 肯定的評価 94.2%/96.2% 「この学校に入る前と後で、自分は変わったと思う」 肯定的評価 84.6%/92.4% ◆保護者アンケート 「授業のカリキュラム・内容は満足していた」 肯定的評価 84.9%/78.2% 「教育内容はお子様にあっていた」 肯定的評価 68.6%/83.7% 「この学校にお子様をいれて良かった」 肯定的評価 96.2%/96.4% 「この学校に入る前と後で、お子様は変わった」 肯定的評価 90.8%/90.9% ⇒生徒アンケートからはコース所属の満足度が高く、その結果として入学前後で自身の変化を感じたことが読み取れ、この点は各コースの取り組みの成果と言える。 保護者アンケートから、学校の教育活動全体を通した評価は高いが、授業カリキュラムや内容についての評価はやや低い傾向にあり、課題があることがうかがえるため、生徒・保護者のニーズに合ったコース運営ができるよう生徒へのふりかえりを実施し、改善につなげる。

	(イ) スクーリング内容の充実を図り、より興味・関心を持てるスクーリングとするための基盤を確立する。 （ウ） 一人ひとりが自分のレベルにあった学び直しができ、学力の定着ができるようにする。	（イ） 学習指導要領改訂を機に、スクーリングの学習内容が生徒の学力と生きていくための力となるよう充実を図る。 （ウ） Ｙチャレンジコース・マイスペースコースを中心に、学びなおしの 講座やＹラーニングによって学びなおしを推進する。	（イ） ◆生徒アンケート 問14「スクーリングでは分かりやすい学習指導をしていた」 問15「教員は熱心に情熱を持って、授業に取り組んでいた」 問18「特色ある科目について満足していた」 問20「必要回数以上のスクーリングに出席していた」 問23「レポートは分かりやすく工夫されていた」 ◆保護者アンケート 問14「本校のスクーリングは学習効果が高まる ようエ夫されていた」 （ウ） ◆生徒アンケート 問27「学びなおしの講座や学びなおしの取り組みがあり活用することができた」 ◆保護者アンケート 問15「基礎的な学力を身につけさせる指導がなされていた」 問17「本校の学習サポートは充実していた」	（イ） ◆生徒アンケート 「スクーリングでは分かりやすい学習指導をしていた」 肯定的評価 94.8%/92.4% 「教員は熱心に情熱を持って、授業に取り組んでいた」 肯定的評価 94.8%/96.2% 「特色ある科目について満足していた」 肯定的評価 91.5%/92.5% 「必要回数以上のスクーリングに出席していた」 肯定的評価 88.0%/96.2% 「レポートは分かりやすく工夫されていた」 肯定的評価 94.7%/90.6% ◆保護者アンケート 「本校のスクーリングは学習効果が高まるよう工夫されていた」 肯定的評価 87.0%/81.0% ⇒生徒アンケートはいずれの項目も 90%以上となっているが、保護者との乖離が見られる。更にニーズを探りながら学習内容を検討していく。 （ウ） ◆生徒アンケート 「学びなおしの講座や学びなおしの取り組みがあり活用することができた」 肯定的評価 67.0%/61.7% ◆保護者アンケート 「基礎的な学力を身につけさせる指導がなされていた」 肯定的評価 85.4%/78.2% 「本校の学習サポートは充実していた」 肯定的評価 90.8%/84.5% ⇒学びなおしの活用については他の項目と比較し低い結果である。2024 年度よりロイロノートを導入し、一人ひとりが自分のレベルにあった学び 直しができ、学力の定着ができるよう取り組んでいく。
生徒理解を深め、生徒一人ひとりに添った生徒支援を実現する	（ア） 生徒支援部会を中心に担任・講師・養護教員・カウンセラー、スクールソーシャルワーカー、支援アドバイザーで学校全体として生徒支援を行っていく。	（ア） 毎週全担任が出席する生徒支援会議や講師への情報共有で、学校全体として生徒支援を行い、生徒が 相談しやすい環境を作り出す。	（ア） ◆生徒アンケート 問28「学校は質問や相談に対して親身になって対応していた」 問29「いつでも相談できる環境が整っていた」 問30「保健室・カウンセリングルームがあったので安心できた」 ◆保護者アンケート 問5「学校は安心できる場所になっていた」 問20「教職員はお子様に親身に適切に対応していた」 問23「教員のお子様への対応の仕方に満足していた」	（ア） ◆生徒アンケート 「学校は質問や相談に対して親身になって対応していた」 肯定的評価 94.8%/96.3% 「いつでも相談できる環境が整っていた」 肯定的評価 91.6%/94.3% 「保健室・カウンセリングルームがあったので安心できた」 肯定的評価 88.5%/ 90.6% ◆保護者アンケート 「学校は安心できる場所になっていた」 肯定的評価 92.5%/94.6% 「教職員はお子様に親身に適切に対応していた」 肯定的評価 86.2%/94.6% 「教員のお子様への対応の仕方に満足していた」 肯定的評価 94.1%/93.1%

	（イ） 合理的配慮が必要な 生徒に行き届き、申請 と実践がスムーズに 行われるよう、体制と 環境を整える。	（イ） 特別支援教育コーディネーターや生徒支援部会を中心に合理的配慮を行う体制を整え、生徒が学校生活を送る上で適切な配慮ができるようにする。	（イ） ◆生徒アンケート 問17「授業は安心して受けられる雰囲気であった」 問31「学校の対応は自分の状況に配慮したものであった」 ◆保護者アンケート 問22「一人ひとりに対する生徒支援体制が整っていた」 問24「学校は家庭と連携した生徒支援が出来ていた」 問25「学校はお子さまの悩みや相談について適切に対応していた」	（イ） ◆生徒アンケート 「授業は安心して受けられる雰囲気であった」 肯定的評価 95.2%/98.2% 「学校の対応は自分の状況に配慮したものであった」 肯定的評価 93.2%/98.1% ◆保護者アンケート 「一人ひとりに対する生徒支援体制が整っていた」 肯定的評価 92.4%/89.1% 「学校は家庭と連携し、生徒支援が出来ていた」 肯定的評価 88.2%/95.5% 「学校はお子さまの悩みや相談について適切に対応していた」 肯定的評価 90.2%/90.9% ⇒生徒、保護者いずれの回答も、それぞれの項目でも90%前後の高水準であることから、引き続き学校全体で生徒支援を行い、合理的配慮の整備とともにすべての生徒が校内で安心して学び、過ごせるような環境整備を行う。
確実な進路保障の仕組みを作る	（ア） 早期に進路への意識付けができるよう進路のカリキュラムを 構築する。 （イ） 生徒の状況把握に努め、保護者との連携のもと適切な進路支援を行う。	（ア） 進路ガイダンスや進路面談の実施、および動画配信やメール配信機能を利用した情報提供を行い、一人でも多くの生徒が卒業時に希望の進路に進むようにする。 （イ） 生徒一人一人にふさわしい進路選 びの支援をし、進路決定率を上げる。	（ア）（イ） ◆生徒アンケート 問32「学校は進路について適切な相談や情報提供ができていた」 問33「自分にあった進路を見つけることができた」 問34「この学校でこれからの目標が見つかった」 ◆保護者 アンケート 問26「学校はお子様の進路について、適切に情報提供し、相談にのっていた」 問27「お子様にあった進路を見つけることができた」	（ア）（イ） ◆生徒アンケート 「学校は進路について適切な相談や情報提供ができていた」 肯定的評価 94.7%/96.2% 「自分にあった進路を見つけることができた」 肯定的評価 81.7%/94.3% 「この学校でこれからの目標が見つかった」 肯定的評価 80.1%/92.4% ◆保護者 アンケート 「学校はお子様の進路について、適切に情報提供し、相談にのっていた」 肯定的評価 87.5%/90.9% 「お子様にあった進路を見つけることができた」 肯定的評価 89.9%/89.3% ⇒進路の情報提供や適切な相談について、卒業生（保護者）からは高い評価であった。 一方、進路選択の幅も生徒も多様化している状況であるため、幅広い進路選択を示し、より早い段階から進路の目標が見つかる工夫が必要である。 学校と繋がっている外部団体等とも連携し、校外活動等が体験できるプログラムも推進する。

開かれた学校づくりを目指し、生徒が活躍できる場を増やす	（ア） YMCA の特長を活か したグローバル教育を実施する。 （イ） 総合的な探究の時間や特別活動、ボランティアにおいて、YMCA の特長を生かした内容を実施し、生徒の主体性や積極性 を促す。	（ア） YMCA のネットワークを通しての海外交流プログラムや、留学生と交流する機会を提供する （イ） 教育目標である「命の尊厳」に沿った総合的な探究の時間 や特別活動、ボランティアを施する。	（ア） ◆生徒アンケート 問9「特別活動やその他のプログラムなどを通して地域や海外の人と交流する機会は 充実していた。」 （イ） ◆生徒アンケート 問1「学校の教育理念・方針を理解していた」 問7「学校行事は生徒が参加しやすいものであった」 問8「ボランティア活動の情報も豊富で参加しやすいものであった」 問10「子どもたちや地域の人たちとも一緒に参加する活動があり満足であった」 ◆保護者アンケート 問7「学校行事はお子様が参加しやすいものであった」 問13「学校行事以外でも生徒が活動できる場が充実していた（ボランティア活動等）」 問19「特別活動の内容や案内は適切だった」	（ア） ◆生徒アンケート 「特別活動やその他のプログラムなどを通して地域や海外の人と交流する機会は 充実していた。」 肯定的評価 72.7%/88.7% ⇒在籍生と卒業生の評価に 16.0 ポイントの乖離がある。学校生活にも慣れ、プログラム参加への機会も増える 3 年次で満足度が高まる傾向があるのではないか。この評価も踏まえつつ、2024 年度には海外との交流プログラムや、留学生や地域での交流、多文化に触れる機会を積極的に設置する。 （イ） ◆生徒アンケート 「学校の教育理念・方針を理解していた」 肯定的評価 90.1%/90.6% 「学校行事は生徒が参加しやすいものであった」 肯定的評価 88.4%/74.9% 「ボランティア活動の情報も豊富で参加しやすいものであった」 肯定的評価 83.8%/88.7% 「子どもたちや地域の地域の人たちとも一緒に参加するプログラムがあり満足であった」 肯定的評価 75.9%/83.0% ◆保護者アンケート 「学校行事はお子様が参加しやすいものであった」 肯定的評価 82.2%/70.0% 「学校行事以外でも生徒が活動できる場が充実していた（ボランティア活動等）」 肯定的評価 88.6%/81.8% 「特別活動の内容や案内は適切だった」 肯定的評価 92.5%/96.4% ⇒本校が大切にしている教育理念・方針に対する生徒の理解は高いものである。 学校行事は、コロナ禍の収束後、徐々に再開はしているが、まだ以前のようには戻り切っていないことが、肯定的評価が低かった要因であると考える。 2024 年度は海外プログラムや宿泊行事も再開し、生徒が参加しやすい行事の提供を行なっていく。

	（ア）（イ）（ウ） 社会の大きな変革の中で新しい学校の形を探究し、地域社会に貢献できる学校づくりを行う。	（ア） ICT の活用を図り、Edtech を推進する。	（ア） ◆自己評価チェックシート 問15「生徒の情報活用能力の育成を図っている」 問16「情報の発信に伴う責任など情報のモラル面の教育に十分取り組んでいる」	（ア） ◆自己評価チェックシート 「生徒の情報活用能力の育成を図っている」 肯定的評価 36.8% 「情報の発信に伴う責任など情報のモラル面の教育に十分取り組んでいる」 肯定的評価 15.8% ⇒本項目については非常に低い評価となっている。2024 年度よりレポートの電子化（ロイロノートの活用）開始し、それに伴う情報モラル指導の向上を目指す。
		（イ） 日本語のサポートが必要な生徒への支援を充実させ、カリキュラムを構築する。	（イ） ◆自己評価チェックシート 問28「他国の歴史・文化の理解、異文化交流など国際理解に関する教育活動を取り入れている」	（イ） ◆自己評価チェックシート 「他国の歴史・文化の理解、異文化交流など国際理解に関する教育活動を取り入れている」 肯定的評価 84.3% ⇒昨年度比較では 10.1%改善（昨年度 73.4%）した。海外ルーツの生徒も増加していることもあり、学校全体の取り組みとして教職員への意識を高めていく必要がある。
持続可能な学校とするための体制を確立させる		（ウ） 「健康教育」の一環として、当事者および保護者に向けた仲間づくりや健康につながるプログラムを実施する。	（ウ） ◆自己評価チェックシート 問23「知性・身体・精神のバランスのとれた人の成長に寄与する健康教育を実施している」	（ウ） ◆自己評価チェックシート 「知性・身体・精神のバランスのとれた人の成長に寄与する健康教育を実施している」 肯定的評価 95.7% ⇒教職員が一致してこのことの重要性を認識したうえで、クラス活動はじめ学校行事全般を通して、学校全体の取り組みとして実施していることがうかがえる。
	（エ） 組織改善の取り組みと将来を担う人材の確保をする。	（エ） 教職員間のチーム作りや教職員研修の充実に取り組む。	（エ） ◆自己評価チェックシート 問4「教員間教科間の相互理解がなされ、信頼関係に基づいて教育活動が行われている。」 問5「教員と事務職員の情報交換の機会があり、相互理解、連携はとれている。」 問36～40「教員研修」項目	（エ） ◆自己評価チェックシート 「教員間教科間の相互理解がなされ、信頼関係に基づいて教育活動が行われている。」 肯定的評価 77.8% 「教員と事務職員の情報交換の機会があり、相互理解、連携はとれている。」 肯定的評価 68.5% 「教員研修」項目 肯定的評価 28.4%（5 項目の平均） ⇒「教員教科間、教職員間の連携」については昨年に続き同等程度で推移している。多様な職制、働き方がある教員間の連携は必須であるため、引き続き教科系列の連携を図る。 　また、教員研修部分については、まだまだ不十分であると捉えている教職員が多いという結果となっている。引き続き、教員の資質向上のための教員研修および初任者サポート制度を整える。